

2023年3月期第3四半期決算電話会議説明および議事録

参考資料:2023年3月期第3四半期決算説明資料

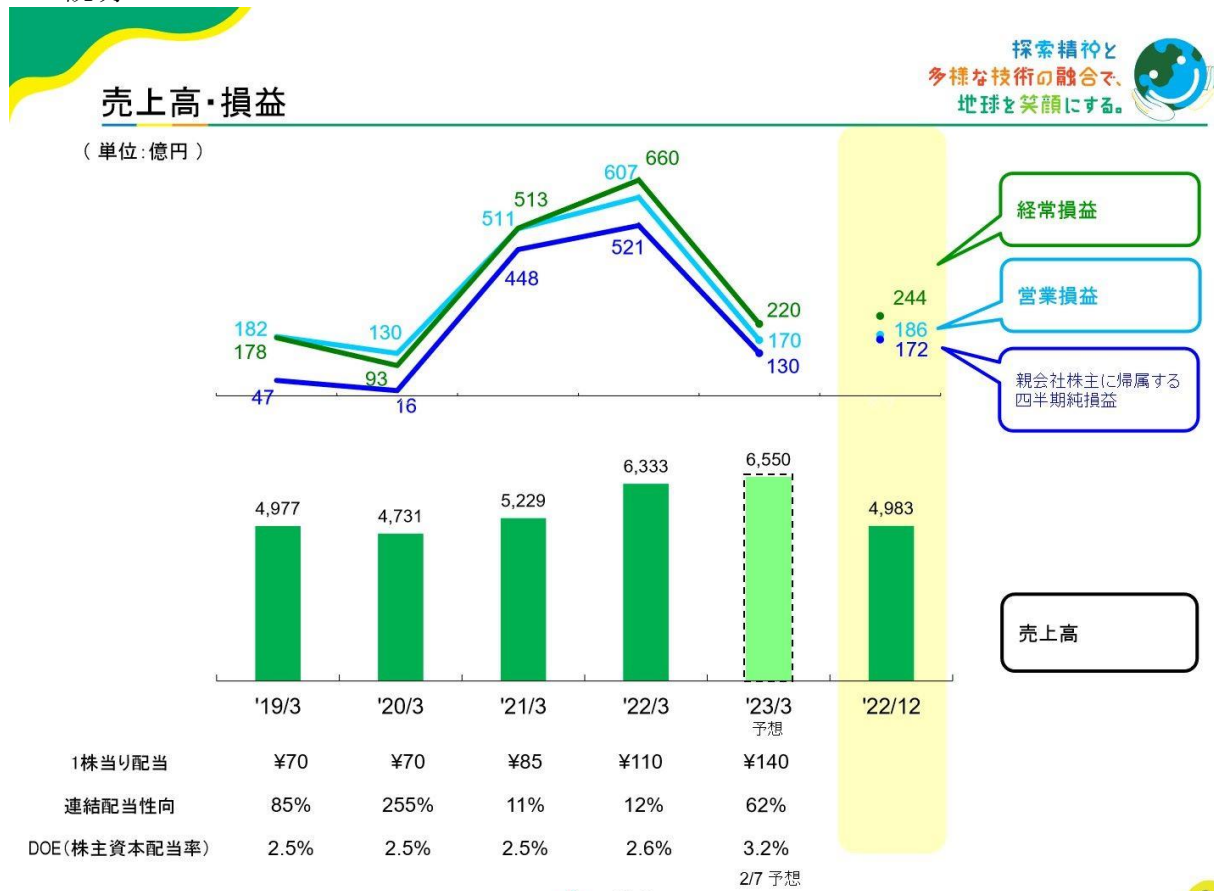
[https://www.mitsui-](https://www.mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=IQM4Cl3%2fpw4%3d&tabid=100&mid=826&TabModule819=0)

[kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=IQM4Cl3%2fpw4%3d&tabid=100&mid=826&TabModule819=0](https://www.mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=IQM4Cl3%2fpw4%3d&tabid=100&mid=826&TabModule819=0)

(補足) PKG : パッケージ基板

HDI : マザーボード (High Density Interconnect)

■ご説明



Copyright © Mitsui Mining & Smelting Co., Ltd. All Right Reserved.

三井金属

2

決算説明資料2ページ「売上高・損益」をご覧ください。

・第3四半期累計での売上高は4,983億円、営業利益は186億円、経常利益は244億円、親会社株主に帰属する四半期純利益は172億円となりました。

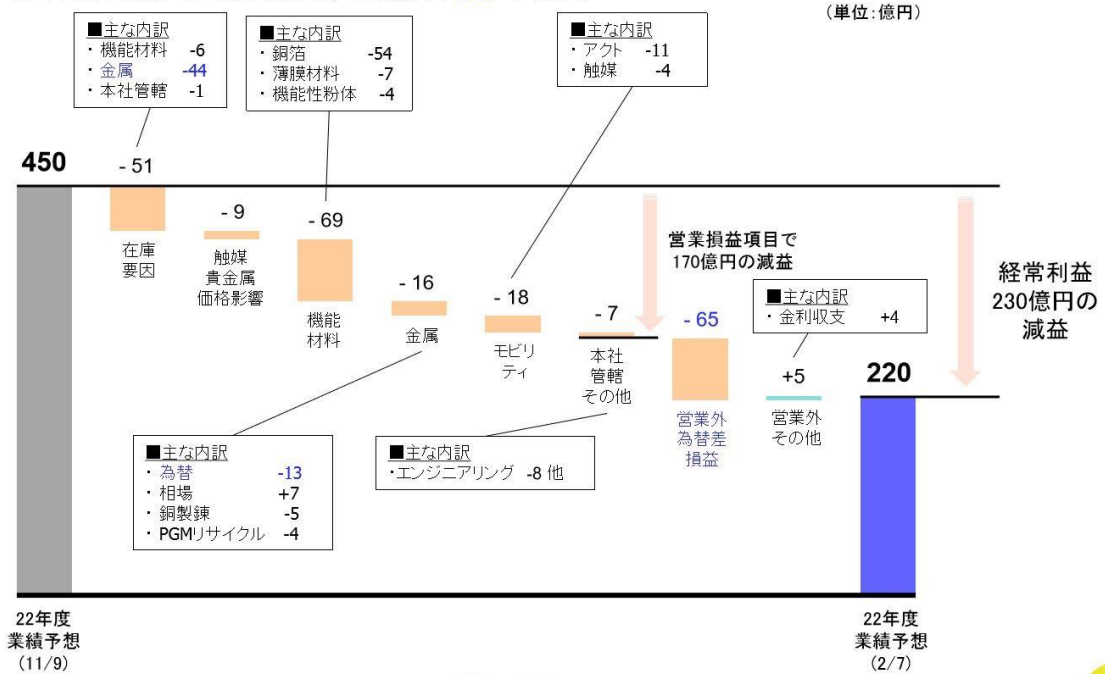
・2023年3月期の連結業績予想は、売上高6,550億円、営業利益170億円、経常利益220億円、当期純利益130億円を見込んでいます。なお、1～3月の諸元については、LME亜鉛価格3,200\$/t、LME鉛価格2,200\$/t、LME銅価格380¢/lb、為替は130円/\$を前提としています。

・配当につきましては、1株当たり140円とし、これまで公表している配当予想から修正しておりません。



22年度経常利益見込

22年度経常利益は220億円と前回業績予想比で230億円の減益
その内、円高による悪化が約122億円(青字の項目)



続きまして、通期の業績予想について、11月9日に公表した業績予想との対比でご説明いたします。決算説明資料4ページをご覧ください。

・11月9日公表の経常利益見込みは450億円としておりましたが、これを230億円下方修正し、220億円と見込んでいます。230億円の減益のうち、青字で示している部分が、為替が円高に振れたことによる影響で、約122億円を占めます。

・セグメントごとに内訳を見ますと、在庫要因で51億円の悪化、その右の触媒事業における貴金属価格下落の影響でマイナスの9億円となっています。これらの要因を除くと、機能材料セグメントにおいて69億円の下方修正となりました。特にPKG向けMicroThin™の販売数量が、長引く在庫調整の影響を大きく受け、従来予想より約半分と大幅に減少していることなどから、銅箔事業で54億円の下方修正。また、薄膜材料事業や機能性粉体事業でも需要の低迷や在庫調整の影響により減益となる見込みです。

・金属セグメントは16億円の減益となる見込みです。そのうち円高による影響が13億円を占めます。モビリティセグメントでも18億円の減益を見込んでいます。中国における日系カーメーカーの苦戦などの影響により三井金属アクトで11億円の減益を見込んでいます。触媒事業はインドの二輪向けが想定より販売量を落としていることや、四輪向けも自動車市場が想定ほど回復していないことから4億円の減益となる見込みです。

・営業外損益では60億円の減益をみこんでいますが、そのうち65億円が円高による影響です。これらの要因から従来予想から大幅な減益となる見込みです。

損益計算書

(単位: 億円)

	実績			予想				
	'22/Q1-3 実績	'21/Q1-3 実績	増減 (22-21)	2022 今回予想	2021 実績	増減 (22-21)	2022 前回予想	増減 (今回-前回)
売上高	4,983	4,637	346 7.5%	6,550	6,333	217 3.4%	6,950	-400 -5.8%
売上原価	4,301	3,757	544 14.5%	-	-	-	-	-
売上総利益	682	880	-198 -22.5%	-	-	-	-	-
販売費・管理費	496	453	44 9.6%	-	-	-	-	-
営業利益	186	427	-242 -56.6%	170	607	-437 -72.0%	340	-170 -50.0%
営業外収支	58	31	28	50	53	-3	110	-60
経常利益	244	458	-214 -46.8%	220	660	-440 -66.7%	450	-230 -51.1%
特別損益	-12	0	-12	-28	-15	-14	-21	-7
税引前利益	232	458	-226 -49.4%	192	645	-454 -70.3%	429	-237 -55.3%
税金費用・非支配株主帰属損益	59	89	-30	62	124	-63	69	-7
親会社株主に帰属する 当期純利益	172	369	-196 -53.3%	130	521	-391 -75.0%	360	-230 -63.9%

Copyright © Mitsui Mining & Smelting Co., Ltd. All Right Reserved.

三井金属

5

引き続き、第3四半期累計期間の実績と通期の見通し等についてご説明いたします。決算説明資料5ページの「損益計算書」をご覧ください。

・第3四半期累計期間は、前年同期に対し、亜鉛価格が上昇したことや為替が円安に推移したこと等により、売上高は346億円(7.5%)増加の4,983億円となりました。営業利益は、電解銅箔やMicroThin™の販売量が減少したことやエネルギーコストの上昇等により、前年同期比242億円(56.6%)悪化し186億円、経常利益は214億円(46.8%)悪化し244億円、当期純利益は、196億円悪化の172億円となりました。

・通期見通しについては、このあと、セグメント毎にご説明いたします。

セグメントの業績(1) 機能材料

(単位: 億円)

	22/Q1-3 実績	21/Q1-3 実績	増減 (22-21)	FY2022 今回予想	FY2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 前回予想	増減 (今回-前回)
■売上高	913	1,036	-122	1,140	1,361	-221	1,270	-130
■営業利益	113	232	-119	115	294	-179	190	-75
■経常利益	121	233	-111	125	300	-175	200	-75
※実力損益	120	215	-94	125	280	-155	194	-69

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

(機能材料製品)	(主な用途)
機能性粉体 (電池材料)	 <ul style="list-style-type: none"> ・ハイブリッド車向けニッケル水素電池 ・電気自動車向けリチウムイオン電池
機能性粉体 (機能粉)	 <ul style="list-style-type: none"> ・各種電子部品 ・ガラス研磨材
銅箔	 <ul style="list-style-type: none"> ・高密度半導体パッケージ材料 ・プリント配線基板
薄膜材料	 <ul style="list-style-type: none"> ・フラットパネルディスプレイ

経常利益の増減説明

['21/Q1-3 → '22/Q1-3 - 111]

銅箔 -71 (電解銅箔・MicroThin™減販他)
 薄膜材料 -24 (在庫要因悪化、減販他)
 機能粉 -20 (銅粉等主要製品減販他)
 電池材料 +2 (増販他)

['FY2021 → 'FY2022見込 - 175]

銅箔 -123 (電解銅箔・MicroThin™減販他)
 薄膜材料 -31 (在庫要因悪化、減販他)
 機能粉 -25 (銅粉等主要製品減販他)
 電池材料 +2

続きまして、セグメント毎の状況についてご説明いたします。

まずは機能材料について決算説明資料11ページの「セグメントの業績(1)機能材料」をご覧ください。

・第3四半期累計期間の経常利益は前年同期比で111億円減益の121億円となりました。要因としては、電解銅箔やMicroThin™の販売が減少したこと等により銅箔事業が71億円の減益となったこと、また薄膜材料事業で在庫要因の影響が17億円減少したことや販売量の減少等によりトータル24億円の減益となったこと、さらに機能粉事業においても銅粉等主要製品の販売量が減少したことなどにより20億円の減益となったこと等で、大幅な減益となりました。

・経常利益の見通しについては11月9日の公表値にくらべ75億円減益の125億円で見込んでおります。内訳は4ページに示した通りで、銅箔事業の減益が54億円と最も影響が大きくなっております。

セグメントの業績(2) 金属

(単位: 億円)

	22/Q1-3 実績	21/Q1-3 実績	増減 (22-21)	FY2022 今回予想	FY2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 前回予想	増減 (今回-前回)
■売上高	1,931	1,735	196	2,600	2,409	191	2,680	-80
■営業利益	52	237	-185	50	342	-292	110	-60
■経常利益	95	251	-155	90	363	-273	160	-70
※実力損益	102	173	-70	117	253	-136	143	-26

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

経常利益増減分析

	21/Q1-3→ 22/Q1-3	FY2021→ FY2022見込
相場・為替	71	75
T/C条件(亜鉛)	13	15
たな卸資産在庫要因	-85	-137
持分法損益	24	15
コークス	-35	-35
受取配当金	1	1
その他※	-144	-207
合計	-155	-273

2022年度年間損益感応度(経常損益)

(単位: 億円)
フルオープン 予約含む

	±100\$/t	13.4	8.6
亜鉛(LME)	±100\$/t	4.0	4.0
鉛(LME)	±100\$/t	5.5	4.2
為替	±1yen/\$		

亜鉛TC条件

FY2020	FY2021	FY2022
299.75 \$/t	159 \$/t	230 \$/t

※その他の主な内訳

21/Q1-3→ 22/Q1-3	エネルギーコスト -62、日比製錬大定修 -25、資源事業部 -23、 亜鉛・鉛コスト増 -18、亜鉛・鉛原料構成差 -12、PGMリサイクル -3
FY2021→ FY2022見込	エネルギーコスト -94、日比製錬大定修 -25、資源事業部 -28、 亜鉛・鉛コスト増 -25、亜鉛・鉛原料構成差 -11、PGMリサイクル -11

続きまして金属事業セグメントです。決算説明資料12ページの「セグメントの業績(2) 金属」をご覧ください。

・第3四半期累計期間の経常利益は前年同期比で155億円減益の95億円となりました。非鉄金属相場および為替の好転によるプラス影響が71億円あるものの、棚卸資産の在庫要因が前年のプラス78億円からマイナスの7億円と85億円の減益要因となったことやコークスを含むエネルギーコストの上昇により97億円の減益となったことが主な要因です。

・経常利益の見通しについては11月9日の公表値に比べ70億円減益の90億円を見込んでおります。在庫要因の影響が44億円悪化したことや円高による影響等が要因です。



セグメントの業績(3) モビリティ

(単位: 億円)

	22/Q1-3 実績	21/Q1-3 実績	増減 (22-21)	FY2022 今回予想	FY2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 前回予想	増減 (今回-前回)
■売上高	1,630	1,540	90	2,150	2,071	79	2,310	-160
(内、三井金属アクト)	(631)	(582)	(49)	(860)	(788)	(72)	(890)	(-29)
■営業利益	47	-6	53	55	15	40	82	-27
(内、三井金属アクト)	(-18)	(-1)	(-17)	(-17)	(-3)	(-14)	(-6)	(-11)
■経常利益	43	-3	46	45	24	21	115	-70
(内、三井金属アクト)	(-12)	(7)	(-19)	(-10)	(5)	(-16)	(0)	(-11)
※実力損益	37	45	-8	54	84	-30	115	-61

※実力損益：経常利益から触媒貴金属価格影響を除いたもの

経常利益の増減説明

(モビリティ事業本部)	(主な製品)
触媒	<ul style="list-style-type: none"> ・二輪車・四輪車 排ガス浄化用触媒
三井金属アクト	<ul style="list-style-type: none"> ・自動車用ドアロック
三井金属ダイカスト	<ul style="list-style-type: none"> ・ダイカスト製品

[' 21/Q1-3 → ' 22/Q1-3 + 46]	[' FY2021 → ' FY2022見込 + 21]
触媒 +60(増販・貴金属価格影響他)	触媒 +32(増販・貴金属価格影響他)
アクト -19(鋼材・樹脂価格上昇他)	アクト -16(鋼材・樹脂価格上昇他)
ダイカスト +8(歩留改善他)	ダイカスト +12(歩留改善他)

アクト増減分析

	21/Q1-3→ 22/Q1-3	FY2021→ FY2022見込
増減販	-17	-20
コスト削減	8	12
その他※	-10	-8
合計	-19	-16

※その他の主な内訳	21/Q1-3→ 22/Q1-3	FY2021→ FY2022見込
鋼材・樹脂価格上昇	-13	-14
輸送費上昇	0	2

続きましてモビリティセグメントです。決算説明資料13ページの「セグメントの業績(3)モビリティ」をご覧ください。

・第3四半期累計期間の経常利益は前年同期比で46億円増益の43億円となりました。触媒事業の利益が、60億円改善したことがその主因ですが、これは貴金属価格影響が54億円増加したことや二輪向け・四輪向けともに増販となったことが影響しています。一方で三井金属アクトは鋼材・樹脂価格が上昇している影響が大きく、前年度比減益となりました。

・経常利益の見通しについては、前回公表値に比べ70億円減益の45億円を見込んでいます。触媒事業が為替影響と販売量の減少の影響で見通しを56億円引き下げたほか、三井金属アクトについても減販の影響等で11億円の減益を予想しています。

■質疑応答

【全体】

- Q. P7の差異内訳において、マージン・コスト他の悪化要因が前年比でマイナス218億円ある。金属についてはP12に記載があるが、機能材料やモビリティ等については分からない。販売数量の落ち込みによる減益とは別に、このマージン・コストの悪化をどう理解すればよいのか。今回の変化が大きい背景も含めて機能材料、モビリティそれぞれで教えてほしい。
- A. 機能材料のマージン・コスト他で大きい要因が、銅箔のエネルギーコスト。残りは変動費、固定費、販管費等の細かな要因の積み重ねで、何か大きい要因があるわけではない。そのため、数量が増えてもこれらの影響は引き続き残る可能性はある。モビリティは自動車部品の鋼材や樹脂価格等の原料代価格アップが大きく占めている。

- Q. 機能材料とモビリティにおいて、エネルギーコストや材料費上昇の転嫁は進めているのか。また、今後これらの成果の刈り取りやさらに転嫁が進む余地はあるのか。
- A. 銅箔については、MicroThin™と一部の電解銅箔について電力代上昇の転嫁を進めている。他の電解銅箔についてもマーケットの動向等を見ながら転嫁できるかどうか引き続き検討する。モビリティのうち、自動車部品の鋼材・樹脂価格の上昇等については、現在お客様に転嫁をお願いしているところ。全量ではないが、少しずつ成果が出てきており、転嫁も進んでいくと考えている。
- Q. Q2からQ3の各セグメントの利益の増減理由を教えてください。
- A. Q2からQ3の機能材料については、特殊要因はなく、銅箔と機能粉の販売数量減の影響が大きい。金属は、在庫要因除きでQ2からQ3で75億円悪化している。銅製錬の大定修でマイナス25億円、エネルギーコストでマイナス10億円強、水力発電の発電量減少でマイナス5億円、持分法損益で取り込んでいるPPCの銅製錬で硫酸単価下落により約7億円の悪化、ワンサラ鉱山の出荷量減少等の影響でマイナス5億円、PGMリサイクルでマイナス10億円程度、その他に原料構成差等で悪化している。操業トラブルなど大きな要因がある訳ではなく、細かな要因が積み重なっている。モビリティは、経常利益がQ2の54億円からQ3はマイナス32億円と86億円の差があり、触媒が多くを占めている。大きな要因の一つが貴金属価格影響で、P10に記載のとおりマイナス20億円の影響が出ている。もう一つが営業外為替差損益であり、触媒でQ2プラス9億円からQ3マイナス39億円とマイナス48億円の影響が出ている。

【機能材料セグメント】

- Q. PKG向けMicroThin™について、スマホ向けと非スマホ向けでどのようなことが起きているのか、現時点で回復時期をどのように見ているか等教えてください。
- A. PKG向けMicroThin™は11月の予想から大きく数量を落としている。前回同様、中華系スマホを中心に、スマホ向けの低調が継続している。非スマホ向けは、前回の説明時点ではスマホ向けほど落ち込みが酷くなかったが、スマホ向け同様に落ち込んだことが大きな要因。非スマホ向けは用途の広がりはあるがメモリ向け中心であり、お客様が高水準の在庫を抱えていることから、前回より落ち込みが大きくなっている。
現時点では来年度のQ1、Q2あたりから回復すると見ているが、明確な根拠がある訳ではない。
- Q. PKG向けMicroThin™において、お客様で在庫調整があるということは、P9の下期の数量は実需より低く出ていると理解してよいのか。逆に今年度Q1まで堅調だった数量には、在庫積み増しの影響が含まれているため、もう少し割り引いて考える必要があるのか。
- A. 現在の販売量が実需を下回っているのは間違いない。過去2年、年率20%程度で成長してきており、一般的な電子材料と比べて非常に高かった。ここまで在庫調整が大きいことを踏まえると、昨年度のQ3辺りから今年度のQ1にかけて在庫需要のようなものが含まれていたと推測される。
- Q. MicroThin™の在庫積み増しの影響を除くと、PKG向けの数量がそれ程増えていないのではと少し不安になるが、原単位の増加やアプリケーションの広がり等により、PKG向けの実需は伸びていると考えてよいのか。
- A. PKG向けMicroThin™は間違いなく増える方向で進んできている。今回のような在庫調整は電子材料では周期的に起こることであり、これらを繰り返しながら中期的には数量が増えていくと考えている。例えばスマホ向けであれば、5G化や高機能化に伴って部品点数が増える傾向にあることは間違いなく、ミリ波対応のスマホになるとさらにアンテナインパッケージ等の部材でMicroThin™が使われることも方向性として見えている。非スマホ向けも現時点ではメモリが中心ではあるが、アプリケーションが広がっていることは間違いなく、中期的に見れば、MicroThin™の成長の見方は変わらないと考えている。
- Q. 電解銅箔もMicroThin™同様に厳しい印象を受けるが、どのようなことが起きているのか教えてください。
- A. 電解銅箔も前回予想から少し落ちている。主に落ちているのが通信インフラ向けの銅箔であり、比較的ローエンド、ミドルレンジのサーバー用途が落ちている。電解銅箔の重量ベースの数量は

Q2からQ3で増えているが、Q4の旧正月の注文が前倒しできたためであり、市況感もQ2の状況が継続している。

Q. MicroThin™、電解銅箔ともに減益は基本的には数量が要因であり、価格や競争条件が厳しくなっていることはない、との理解でよいか。

A. その通り。

Q. 銅箔においてHDI向けMicroThin™で新規採用があった等、何か変わったことはあるか。

A. HDI向けMicroThin™は、これまで中華系スマホメーカー2社に採用されていたが、もう1社増えて3社となった。用途はハイエンドモデルのフォルダブルと呼ばれる折りたたみのスマホ向けであり数量的なインパクトはないが、採用した会社が増えており、今後ハイエンドからミドルのモデルに展開されて数量が増えることを期待している。

【モビリティセグメント】

Q. モビリティの下方修正が経常利益115億円から45億円と大きく、特に触媒のインパクトが大きいため、もう少し解説いただきたい。

A. P10記載の貴金属価格影響マイナス17億円および営業外の為替差損益マイナス65億円の内、マイナス44億円を触媒が占めている。

Q. 触媒の営業外為替差損益について、上期の大きな差益から下期の大きな差損に変わった要因は何か。

A. 触媒は原材料の貴金属を日本で加工し、製造拠点のインドやインドネシアに現地通貨建てで販売している。Q1、Q2はインドルピー、インドネシアルピアに対して円安で進行したため、営業外の為替差益が発生した。Q3に入り、ドルに対して円高となったように、ルピー、ルピアに対して円高で進行したが、ドル円以上に円高が進行したため上期の為替差益より下期の為替差損が多く発生した。

【事業創造本部】

Q. 本日発表された全固体電池向け固体電解質の内容について、進捗等を含めて答えられる範囲で説明してほしい。

A. 全固体電池向け固体電解質「A-SOLiD®」の生産能力を倍増するというリリースを本日も行っている。リリース文に書いてある通りだが、お客様の開発試験による引き合いが非常に強くなっており、このままでは現状のキャパが不足するため倍増することを決定した。固体電解質の進捗はなかなか表に出ないが、着実に進んでいることがこれで分かっていたかと思う。

Q. 民生用途で新しい拡大が出ているという訳ではなく、自動車向けの試験用で伸びているとの理解でよいか。

A. その通り。

以上